



親友が裏切り者であったり、娘が親を裏切ったりする。そして、あいつは敵だ、ひどい奴だと勘違いしていた人が、救う神であったりする。これらの経験は戯曲や脚本の人間関係を書くには役に立つ。ギリシャ悲劇か

ら時代劇、現代劇までテーマはそれである。利権をもたらしにくれる人がいい人とは限らない。裏がある。今日も新聞をぎわせている問題がそれである。

祖母の旅籠には大木を切り抜

た。祖母の幼なじみもよく座っていた。まだ、もらい風呂の習慣があった。祖母の幼なじみは祖母の旅籠に風呂に入りに来ていたのである。

2人がしゃべる星鹿の言葉はまったくわからなかった。祖母

この家の舅は嫁を甘やかしている。そのたぐいである。わたしも酔うと毎晩、家内には同じ話をするようである。故郷へ帰りたい、墓はどこにするか。聞き飽きている家内は作り笑いをしてうなずくだけ

火鉢囲んで同じ話

いた大きな古い火鉢があった。旅籠に泊まった人はこの火鉢で暖を取っていた。夏の火の気のない火鉢の周辺は涼しかった。

の幼なじみは山下のおばばとい

である。それが不満で文句をいう。毎晩がこの繰り返しである。

昔の家は風通しがよかった。それだけプライバシーにも欠けていることになる。奥まで見通し

た。毎晩、同じ話をして飽きないものである。そこにいない人が悪口の餌になる。あそこの家の嫁は金遣いがだらしない。あそ

風呂上りの祖母は黒い膏藥を肩に貼っていた。その姿には色

ない。古い映画を見ると、お齒黒を塗った老婦人が登場したりする。

祖母は箆笥から手のひらに乗るような、ちっちゃなみつつの猿を取り出してわたしに語った。「ミザル、イワザル、キカザル」。わたしは見なければいけない、いわなければいけない、聞かなければいけない職業を選んでしまった。祖母の忠告は避けたのである。祖母は、朝な夕なにわたしを横に座らせて仏壇を拜んだ。この駄だけはいまも守っていて、わたしは朝な夕なに仏壇を拜む。もうひとつ「オモワザル」という猿がいたのを知らなかった。